

なにゆえに共生社会論があるのか

岡本智周

再帰的な近代化

過去20年間の社会学を強く規定した理論の一つに、「リスク社会論」がある。ウルリヒ・ベックの著作『Risikogesellschaft』(Beck, 1986=1998)を出発点にしたこの理論は、当初は1960年代から80年代にかけての西ドイツの社会変動を主に念頭に置いた社会問題・社会病理の構造分析であったが、次第に先進諸社会に共通する図式を浮かび上がらせるものとなっていった。それは、20世紀後半を生きる人間が今まさに経験している近代性にこそ、現代の社会問題・社会病理の原因が内在していることを論証し、産業社会が再帰的に近代化している過程を捉えることになったからである。

「再帰的な近代化」とは、かつて近代の名の下に作られたモノ・コトが、再び近代化の対象となっていくことである。明治維新を契機とした日本における「伝統社会」から「産業社会」への移行を例に考えれば、産業社会の初期に近代化によって克服されるべきものは伝統社会の遺制であった。そこでは新たに近代人となった人びとが現実的な貧困を克服するために旧来の共同性を解消して都市を作り、男性／女性役割を峻別した家族制度を作り、それらの小集団を統制するための中央集権的な統治機構を作り（学校教育制度はこの一部としてある）、それに帰属するものとされた「我々」を総称する「日本人」という概念を作った。

しかし近代化が一定程度進行した現在に生きる我々が直面するのは、むしろそのような近代性が生み出してきたモノ・コトから被る問題であり病理である。我々にとっての克服すべき課題とは、たとえば都市化がもたらした住みづらさであり、日常生活とそぐわない性規範であり、形式化した官僚制の動脈硬化であり、「外国人」と共にする現実の社会生活である。把握しなければならないものは、近代以前の要素によってではなく近代の中で形作られてきた制度が問題を生じさせているという構造なのである。端的な例として環境問題を考えれば、我々にとっての主要な問題とは疫病や旱魃といったまさに天然自然の害悪ではなく、人の手が入ったがための造成地の崖崩れであり、建築材として重宝がられた石綿の問題だということになる。

リスク社会と個人化

『Risikogesellschaft』の邦訳ではうまく訳し分けられていないが、ベックは伝統や天然自然がもたらす害悪のことを「危険」(Gefahr; danger)、近代が生み出したものによって生じている害悪のことを「リスク」(Risiko; risk)と称している。そして、科学技術の発展と福祉政策および民主主義の充実が「危険」を一定程度克服したことで「リスク」の問題が正面に据えられるようになったことを、先進諸社会における1960年代から80年代の間にみられた社会構造の転換の説明の根拠とする。これが「産業社会」から「リスク社会」への移行である。前者においては「富」のヒエラルキー的な配分が推し進められ、社会問題についての考究もその図式の下で行われていたが、後者においては「不安」の水平的な